

砂浜にきれいな貝殻が落ちていた。砂漠に落ちた星を思わせる貝。雪花石膏にほんのり血色が通ったような色あいが美しく、私はかがみこんで、それを拾った。

貝は、手の中で、キラ、と輝く。まるで内部から発光しているかのように。それを手にしているうち、デジャ・ヴーのような感覚が私を襲った。これと同じようなシーンをどこで見なかっただろうか？ 無人島の浜辺で、一人の中年女性が貝を拾う場面——しばらく考えて、それが昔読んだリンドバール夫人の『海からの贈り物』であったことに気づいた。

——ウオン。

リズが待ちきれなくなったのか、短く吠えた。彼女は十五メートルほど先に行っていて、こちらを振り返り尾をちぎれるようにふっている。

「わかったわ。待ってて」

私は答えると、立ち上がった。拾った貝をどうしようか、ちよつと考え、手にぶらさげていたポーチの中に入れる。

そのまま砂浜を歩いていくと、すぐ棧橋だ。それを目にして、思わず首をかしげた。

——どうしたのかしら？

まだ約束の時間には十分も早いというのに、もうボートが来ているのだ。ボートといっても、実体はあちこち塗料のはげた古ぼけた漁船で、乗っているのも同じように年代物の老漁師。彼は私を見ると、赤銅色の手をあげた。

「おはよう、早かったのね」

私は、ボートに駆け寄りながら言った。

「うんにゃ。ちよつと勘違いをしていつもより早く来すぎましたわ」

老漁師——磯村さんは、ボートから降りて私に笑いかけた。

「いつもありがとう、磯村さん」

「どういたしまして、瀬木先生。ほれ、これが頼まれてた買い物でさ」

磯村さんは、積み込んである荷を指さした。パン、野菜、肉、米袋（ただし五キログラムの）などが、にぎやかにちらばっている。この島からボートでほんの五、六分ほどの所に磯村さん達の住む比較的大きな島があって、そこで日常のものはほとんどまかなえる。私もボートのライセンスは持っている、自分で買い物しようと思えば十分できるのだが、つい磯村さんに頼んでしまう。買い物をする時の島のおばさん達の興味ありげな視線やそれとはない詮索がわずらわしいのだ。

「野菜はまたゴーヤーを持ってきましたよ。苦いし、調理法があんまりないからって本土の人達は言うけど、わしらの元気のもとにはゴーヤーですからね」

「ありがとう」

本当はゴーヤーのえぐみは天ぷらにでもしないとなかなか抜けない。いいところ、お湯で煮てにが抜きした後、炒めるのがベストの方法で、私はこの野菜が好きでないのだが、親切な磯村さんに言う訳にはいかない。

私は、持ってきたシヨップ。ピングカートに食料をつめると、磯村さんに買い物代の入った封筒を渡した。

「今日も暑くなりそうね」

「ほんとでさ……それにしても、瀬木先生も変わったお方ですな。無人島に、一人で住もうとなさるんですから。こちらへ来て、もう二年くらいにならるんで？」

「正確には一年半よ」

「立派な家まで建てられて……。まあ、世の中にはいろいろ変わった趣味を持つ人もいるっていうのは、私くらいになればわかるんだけどね。でも、誰もいない島で一人でいるなんて怖くないんですか？」

「怖いといってしまうえば、どこにいても怖いわ。とにかく、今のところ私はこの生活に満足してるの」

「へえ」

磯村さんはあきれたように首をふってみせた。けれど、「じゃあ」と言うトボートにエンジンをかけ、その姿も白い波しぶきを残して消えてしまった。

私も、家に帰る。小さな車輪のついたシヨップینگカートをひっぱりながら、砂浜を歩くのはなかなか難しいけれど。私とリズの住む家は、砂浜から歩いて4、5分のところに建っている。亜熱帯の少し陰鬱な影を持った緑の植物が繁茂する一角。その中に佇む、目にしみるような白いコテージ。けれど、それは北米の都市の郊外にこそふさわしい広いポーチと金のノブが光るドアを持つている。ここ、八重山諸島の湿気を重くふくんだ南方の風土には、間違った土地から移植されたように見える。

でも、私はこのコテージが建てたかった。だから、台風の多い気候も考慮して名の通った建築家に設計を依頼したのだ。

キッチンに入り、冷蔵庫や棚に食料品をしまった。そうして、私はアトリエへ向かう。忠実なりズが後からついてくる。二階のアトリエは黒みがかつた褐色の木の床に白い壁、南にはりだした大きな窓からは海がいっぱいに見わたせるといふ簡素な空間だ。そして、部屋の真ん中にはウォールナットでできたイーゼルがでんと置かれている。

キャンバスの上の絵には、植物が複雑にからみあい、アラベスクを作りあげている四角い枠がある。華やかな色づかいがほどこされているものの、全体の印象はだ。そして、私の仕事はこの絵に生命を与えること。

絵筆をとり、深い深い緑の絵具にひたした、ちやうどその時電話が鳴った。もう、仕事にかかろうとしたら、こうだ——私はため息をつき、受話器を取り上げた。

「はい。瀬木です」

「瀬木先生でいらっしやいますか？今、お電話してもよろしいでしょうか？こちらA出版社の者です」

「ええ。何でしょうか？」

「いらだちがあらわれないよう、口調をおさえながら私は言った。

「6月に刊行する予定の作品集の件ですが、収めるのは絵ばかりでなく、テーブルウェアもページの中で紹介したいと思うのですが、いかがでしょうか？」

「テーブルウェア？」

「以前、植物の紋様をデザインされたと思うのですが」

「ああ」

思い出した。陶磁器のメーカーに頼まれてした仕事。メーカーからは、後日製品を送られてきたが、それを見るなりぞっとしてしまった。はげたような色あいの植物のレリーフがコーヒーカップを縁取っている。それは絵とかデザインというより、シールを貼り付けただけのような安っぽさだった。私は大急ぎで、それをキッチンの食器棚の奥にしまいこみ、一度も使っていない

い。

「どちらでもいいわ。好きにしてください」

「では、巻末エッセイの原稿を送ってください。今月末ということではいい」

要件が終わって、電話を切るとそれだけでグツタリしてしまった。島に一人いても、完全に外界と接触を断つなんてできやしない。電話の向こうから、都会のざわめきや人の匂いが送りこまれてきたような気がする。それは、外界から遮断されたドームにいるような私をおびやかすことだった。

私は、いったんおいた絵筆を握りなおすと絵に立ちむかった。月桂樹の飾りのついた枠が周囲にふちどられ、その中にシンプルな形状をしたロータスの花が水面に浮かんでいる様が描かれている。ロータスは匂うように美しく咲き、花と葉を囲む水面には眠るような静けさがあった。

作業に集中していると、いつの間にか太陽が中空にさしかかっている。そろそろ、お昼にしよう。

キッチンに行くとも鍋に湯をわかし、パスタをゆでた。そして、レトルトの袋に入ったボロネーズソースをあたたためる。ソースの香ばしい匂いがして、私の簡単なランチははじまった。リズが物欲しげにクウンと鳴くので、ベビーカーをひとかけらやる。

島での生活はこんな風に静かだ。黒ラブラドル犬のリズの吠え声で目が覚め、彼女にドッグフードとミルクを与え、私はパンとコーヒーの朝食をとる。そして、リズを連れて散歩にでかけ、一日の大半をキャンバスに向かい、夕刻にはまたリズと海辺で遊ぶ。水平線に陽が沈もうとする頃の砂浜はピンクコーラル色に輝いていて、そこをリズの黒い姿が駆けてゆく。波が浜にうちよせる音も聞こえる――それらは夢のシーンのように美しい。

簡単な夕食（サラダにシチューとか、ブイヤベースとか）をとった後、私は二階の寝室にアガリベッドに倒れこむ。真上にあるのは、一畳分ほどの大きな天窗。私が建築家に特別に頼んだ窓だ。そこからは、降るような星空が見える。

蒼穹に煌めく銀色の星達。それは私にもう一つの星空を、違う海辺を思いおこさせる――。

アメリカ西海岸。甘い潮風が吹き抜ける夜のビーチ。白い家の白いデッキチェアにすわって、私は夫とワインを飲んでいた。けれど、私達がかわしていた会話は、潮風のように甘くはなかった。

「こうして君と向き合っているも」

夫はワイングラスを口から離れた。

「何千キロと遠くへだたっているかのようだ」

私もワイングラスを離し、静かに彼の顔を見た。私達は太平洋をのぞむ、西海岸の夜々のどこかで互いを見失い、夫は私の人生から去ってしまった。

私はそこで目を閉じた。力をぬいて、心と体をゆっくり開いていく。アメリカでの日々も、日本に帰ってからの成功も別の時代、別の人生のことだ。

今の私は、この島に包まれている。ベッドの下で、リズが身じろぎした。私は体をのりだすと、その短い、ちよっとザラザラした毛をなでてやる。

島に来てから一年と八カ月が過ぎた春のはじめの一日。私は、いつものようにリズを連れて、朝の浜辺に出た。潮の香りがいつもよりきつい。植物にも、風にもかぐわしい息吹が感じられる。

前をゆくリズが突然吠え、駆けだした。いつもとはうってかわって興奮した様子で。一体、どうしたのだろうか？

私はリズを目で追う。棧橋にボートがとまっていた。だが、今日は磯村さんの来る日ではない。それに、このボートは流線形の船体に赤と青の鮮やかなラインが走り、光るように美しい。

リズの声が聞こえたのか、ボートのキャビンのドアが開いた。中から、誰かが出てきた。漆黒の髪に強い光を放つ目――まだ青年のように見える。

「こんにちは」

青年は微笑しながら、軽く手をふった。明るい自信にみちた声。けれど、私にはすぐ返事ができなかった。突然の出現にとまどっていたのだ。

「失礼ですが、画家の瀬木容子さんですよ？」

「ええ。そうですけど」

私は警戒しながら言った。何者なのだろうか？ この青年は。私の島での平和な日々を破壊しにきた侵入者なのだろうか？ でも、彼が「ああ、よかったです」とあまりにもうれしそうに言ったのには驚かされた。

「瀬木さん、あなたに会いたいと思って僕はこの島に来たんですよ」

「私に会いに？」

「ええ。無人島に一人住んでいるという女性画家に」

「あいにくだけど、私は人に会いたくないの。大体、あなた、自己紹介もしてないじゃない」

「あっ、すみません」

青年は頭をさげた。

「僕は矢吹透という者です。先日勤め先を退職して、しばらく世界を見てみようと思っただけです」

「そのわりには、南の海で優雅なクルージングという感じね」

私の言葉は我ながら皮肉っぽく聞こえた。こんな洒落た船に乗った若者が、バックパッカーの旅行者のようなことを言うなんて。

けれど、矢吹青年は怒った様子はなかった。

「瀬木さんの絵を拝見したことがあります。雑誌のインタビューを読ませていただいたこともありますが、植物やその模様デザインを描かせたら第一人者であることも知っています」

「だから、どうだというの？」

少しうるさくなつて、彼の言葉をさえぎった。

「僕はただの一ファンにすぎませんが、沖繩本島からこの離島にやってきた時、地元のひとから、瀬木さんが島に一人で住んでいると聞いて、寄ってみたいなくなつたんです」

「島の人達は、私が人に会いたがらない、ということも言っていたでしょう」

「ええ。極度の人間嫌いになつています」

「その通りよ。だから、あなたも私のじゃまをしないで。あなたはあなたの旅を続けられたらいいわ」

「そんなにそっけなくすることもないでしょう」

矢吹青年は船から降りてくると、棧橋に立った。

「僕の存在があなたを困らせることにはならないと思いますよ。僕は、この島でしばらく暮らすことにしました」

「ちよっと待って。この島で暮らすって……」

「このボートのキャビンで寝泊まりし、食料は近くの島に出向いて調達してきますよ。あなたの邪魔にはならない」

「そんなの許さないわ」

「おや、この島はあなたのものですか？」

「そういう訳じゃないけど……」

私は口ごもった。何ということだろう。平和で孤独な日々が破壊されようとしている。

「ああ、この犬。いい犬ですね。何て名ですか？」

リズがいつの間にか、彼の足元にうれしそうに近寄り、その手をなめている。

「リズよ」

「リズ……いい名ですね。僕も犬を飼っていました。バーニーズマウンテン・ドッグという犬種です。こぶる陽気な奴でしたが、半年前死んでしまいました」

「そう。犬が好きなのだけは、お互い共通してるみたいね」

彼はリズの頭をなで、喜んだりリズがその顔をなめるがままにさせていた。

よほどの犬好きでないと、こんなことはさせないだろう。その様子を見てみると、私の意固地さもすこし溶けかかってしまった。

「瀬木さん、この島はどれくらいの大きさがあるんです？」

彼がこちらを向いた。

「さあ、よくわからないわ。でも、大体3キロ周囲ぐらいしかない小島よ。

この地方独特の常緑の植物が生い茂るくらいで、何も取りたててないの。十数年ぐらい前まで、数家族が住んでいたらしいけど、今は誰もいないわ。いるのは私だけ」

「ふうん。この島を探検してみるのも楽しそうだな」

「探検だなんて」

こんなちっぽけな島、と続けたいのを私はおさえた。

「私、そろそろ帰らなくちゃ。リズの散歩タイムも終わったし」

「ああ、わかりました。僕はこれから島を歩いてみることにします。その後で、あなたの家にお邪魔してもいいですか？」

「いいわ」

私は、彼にすっかりなついてしまっているリズをせきたてて、コテージに帰った。ドアを閉めて、家の中に入りながら、私は浜辺に突然あらわれた船と青年について考え続けていた。一人っきりの島にやってきた訪問者。――何かとてつもない変化が訪れるのではないだろうか？ この世界に、とりわけ私自身に。自分以外の人間が、この島を歩いているかと思うと、風が木々の梢をゆらす音、鳥の鳴き声にもいちいち反応し、絵筆を走らせるのを一瞬やめてしまう。おかげで、絵の周囲をふちどる月桂樹のレリーフの一つを失敗してしまった。

青年がコテージにやって来たのは、5時近くになっていた。訪問客なんてあるはずもないコテージにインタフォンなんてない。彼が外で大声で呼ぶのが

聞こえた。

「すみません、矢吹です」

私はあわてて、階下に下りると、ドアを開けた。

「遅かったのね。もう、来ないかと思ったわ」

「浜辺を歩いたり、島の植物相を観察してたら夢中になっちゃって」

矢吹君は、笑いながら室内に入ってきた。廊下の壁に幾つかかけてある、私の絵やデザイン画。北欧製のシンプルなキッチンテーブルとチェア。居間のソファに座って、こちらをうれしげに見ているリズの姿――彼はゆっくりとこうしたものを、確認しているようだった。

その若々しい横顔を見ながら、思った。この人は、いったい何才くらいなのだろう？ 浜辺ではじめて会ったときは二十六、七才の青年に見えた。けれど、「この瞳の深い落ち着きを見たら、三十才を過ぎているのかもしれない。

「いかにも瀬木さんらしい家のたたずまいですね」

「私らしい？」

「すごく静謐な空気が漂っているという意味です。外は南国ムード満点なのに、この家に入ると北方の空気がする」

「それはほめ言葉と受け取っていいのかしら？ ……それよりも、お茶でも飲みましょう」

私達はキッチンに入ると、テーブルに向き合った。数分もするとケトルの湯がわいて、私はゆっくりとコ―ヒーを淹れた。

「島の向こう側には、木造の廃屋が何軒か残ってますね」

「あら、そう？ 知らなかったわ」

「あなたは島を歩いたこともないんですか？」

「私は、このコテージの周囲を回って、犬と浜辺に行って波打ち際で遊ぶだけよ」

「そんなに無関心なのに、なぜ、この島に住もうと思われたんです？」

「気が向いたから」

「そんな簡単なことではないでしょう」

「気づくと、真剣な顔でこちらを見ている。つられて、私も真面目に答えました。」

「世間が求める絵を描いていたら、私の描きたい絵と違うことに気づいたの。私が今までかいていたのは、商業主義という魔法の粉のかかったもので、口あたりはいいけれど、表面的な絵だったわ。それに気づいたら、個展やインタビュー、そういったものがすべていやになってしまったの」

「それで、世間から身を隠してしまいたいと思ったんですか？」

「ええ。行き先は、別に島でなくてもかまわなかったわ。俗っぽい世の中から離れられるところなら、どこへでも」

「わかりました」

矢吹君はうなずいたが、また続けた。

「それで、あなたは幸福ですか？」

この問いは私の不意をついた。一瞬茫然として、それからやっと言った。「そんなこと考えたことないわ。ただ、わかっているのは、自分がこの島にいて満足してるってことだけ」

私達はしばらくだまって向き合っていた。

「この島の植物相は」

突然、矢吹君が話題を変えた。

「あなたが絵のモチーフとしてしているのとは違うようですね」  
「そう？」

そんなこと、今まで意識したことがなかった。私のかくのは、厳密なボタニカル・アートではない。緻密な細密画は、まだ写真もなかったところに辞典を作るために使われた名残だ。その一級品を見たいなら、ルドウーテあたりにあたればいい。私の植物たちは、心の中の植物園に上げているものだ。「マングローブやオキナワキョウチクトウといった、典型的な琉球の植物が茂っていますね。それに月桃なんかも」

「あいにくだけど、私この島に生えている植物を熱心に観察したことないの。簡単なスケッチを何枚かしただけ」

「やれやれ。変わった人だな」

彼は苦笑すると、コーヒーの残りをすすった。

「あなた、植物に興味があるの？」

「興味というのとは違いますが、植物紋様が僕をひきつけるんですよ」

「あら」

私はうれしくなった。こんなところで、同好の士に出会うなんて。

「十九世紀末のウィリアム・モリスがデザインしたのも、中世の写本をもとにした植物紋様でした。写本のページをふちどっている飾りもブドウの葉をもとにした一種の紋様です。遠くギリシアの神殿の柱の柱頭に彫られたのも、アカンサスの葉でした。昔から、人間は植物の紋様に託して何かを伝えたいかっただのかもしれないですね」

「私の絵も植物のつるが葉や実をしげらせながら、作品をふちどっていくものが多いわ」

「そうですね」

「ただ、それを表現することを私の中の何かが望んでいる気がしたから、かいていたのだけど、それにも意味があるのかしら？」

「あると思いますよ」

矢吹君はテーブルから立ちあがった。見ると、キッチン窓から薄紫色の空が見えた。世界が夜に移りかわろうとしている時の色だ。キッチンの中も薄暗くなっている。

「そろそろ僕はボートに帰ります。じゃあ、瀬木さん。また、明日」

そう言うと矢吹君は帰っていった。さっきまで、ふんわりと人のいる暖かみにみちていた家が、少しひんやりとして感じられた。

私は矢吹君がテーブルの上に置いていったコーヒーカップを見つめながら思った。あんなに人に会うのが嫌で、日々の買い物もほとんど磯村さんに頼んでいた私。誰とも会いたくなかったし、誰とも話したくなかった。それなのに、今朝会ったばかりの青年を家に呼び、お茶までふるまっている。一体、私はどうしたのだろうか？

考えてみたが、自分でも自分の気持ちかわからなかった。世の中を遠く離れ、孤絶した場所で制作にいそしんでいたはずなのに。ひよっとしたら、意識していなかっただけで、私は淋しく退屈していたのだろうか？

ぼんやりもの思いにふけていたら、もう真っ暗で、ミッドナイトブルーの空には月が金色に輝いていた。

あわてて立ち上がると、浴室に行き照明をとまず。オレンジ色の明かりが

乾いた白い浴槽やタイルを照らし出した。この無機質な空間に灯がともると、私は宇宙船の中に入ったような気持ちになる。でも、一瞬あとには、その白さが血の赤でぬりつぶされるのを想像してしまう。これは、過去の思い出がよびさます悪夢だろうか。

血の幻影を振り払おうと、身につけていたブラウスとジーンズを脱いで裸になった私はシャワーの下に立った。ノズルをひくと温かくうるおいにみちた湯が肌をすべってゆく。少しべたついていた肌が生まれ変わったように、気持ちよく水滴をはじく。

けれど、と私はお湯をはった浴槽につかりながら思う。私はもう若くはない。水面ごしに見えるのは、まだまだ弾力があるとはいえ、若さの絶対的な恩寵からは身放された肉体。三十八才という年齢相応の。これから、ゆっくり老いていこうとする女性の体だ。

湯から出て、大ざっぱにタオルで体をふくとバスローブをはおり、寝室に上がった。窓辺からは、くつきりと強いコントラストを描く熱帯樹の黒い影と静かな波音が聞こえる夜の海が見える。月光に照らされた浜辺は砂の一粒一粒が白銀色のパウダーのようだ。

そうして、浜の中心の棧橋には、流線形のボートが横たわり、キャビンには灯がともっていた。

——今、何をしているのかしら？  
私は、いつまでも窓辺に立ちつくしながらその灯を見つめていた。

翌朝、リズの「ハアハア」という息づかいが耳もとでして目が覚めた。リズの顔が目の前いっぱい広がって、思わずのけぞったものの、その愛情いっぱい笑い顔は抱きしめてやりたいほどかわいい。彼女がよく浮かべ、深い思慮を秘めた表情——それを見ると「犬はなんでも知っている」という確信にちかいものさえ感じてしまう。

「おはよう、リズ」  
そういいながら、ベッドから降りたった時思い出した。昨日の訪問者のことを。私は彼を追い払うべきなのだろうか？ それとも、このまま受け入れるべきなのか？

決心がつかないまま、朝食を食べリズを浜辺で遊ばせるため外に出た。今日もいい天気だ。祝福の光が舞いおりているかのよう、自然は輝いてみえた。コテージのそばに生えているゴムに似た木の葉もつやつやと光っている。私は近づいて、その葉を見た。北国の繊細なシルエットを持つ植物（トウヒとかモミとか）に比べたら、大ざっぱで葉も厚くぼってりしている。気のせいかな葉脈の模様まで単純に見える。でも、あつけらかなとした明るさがその葉にはあった。

浜辺まで歩いていくと、リズが私を追いぬいて一直線にボートまで駆け寄った。矢吹君が気にいったらしい。

すぐキャビンのドアが開き、矢吹君が姿を見せた。

「おはようございます」

「おはよう 矢吹君」

そういったとたん、もう彼を追い出せなくなっているのがわかった。

「島のはじめての夜はどうだった？」



「いや。よく眠れましたよ。実いうと、ここへ来るまで、あちこちの島でもボートで寝泊まりしてたんです」

「このボートはあなたの？」

「いや、叔父のです。僕がこちらの方へ来たいと思ったらかしてくれたんですよ」

「でも、運転は慣れてるのね？」

「子供の頃から、海で夏を過ごすことが多かったから」

「ああ、そう」  
私は深呼吸をして潮風をすった。さわやかでいながら生き物の営みを感じさせる匂い。この匂いをかぐと、体の奥がざわめくような感じがする。

「瀬木さんは、船は持っていないんですか？」

「一応、一隻ボートを持ってるわ。ここから少し離れたボート小屋にとめっぱなしにしているけれど」

「どうして？」

驚いたようにこちらを見る。

「安い物も地元の漁師の人に頼んでるし、必要ないの」

「そりゃ、いけないな」

矢吹君は、頭をふると次のような爆弾発言をしたのだった。

「ねえ、瀬木さん。僕のボートに乗って、隣の島へいつてみませんか？」

「いやよ」

私は即座にいった。まっぴら、ごめんこうむりたい。

「あなたのいう漁師の人もその島に住んでいるんだと思いますが、僕が感じたかぎりでは、活気にみちたよい所でしたよ。いい気晴らしにもなるし」

「私はなるだけ、ここから出たくないの」

「ねえ」

矢吹君は私の顔をのぞきこんだ。

「あなたの場合、外へ出ることを嫌がっているというより、恐れてるんじゃないですか？」

こちらが黙っていると、さらに続けた。

「もし、あなたが病気になったり、瀕死の状態になったとしたら、どうするんです？ 誰もそのことを知らないし、助けにも来ない。その漁師の人がたまたま来ている場合をのぞいてね」

「……」

「いきなり、外へ出るとはいいませんが、ちよつとのぞいてみるくらいはいいでしょう？ 世の中も悪くないと思うはずですよ」

「リズもつれていっていいかしら？」

私は力なくいった。こちらの負けだ。矢吹君の言うとおりに、私は恐れてくる。この島以外の世界を。

「もちろんですよ。さあ、早速行きましょう」

矢吹君は、私に手をさしのべた。その手につかまりボートにのりこんだ。そうしてリズの方を振り返ると、彼女は自分からひよいとのりこんできた。

キャビンに入ってみると、このボートが予想以上に贅沢なつくりになっているのに驚いた。あめ色に輝くウッドパネルやマホガニー調の木製のドア。運転席の後部に狭い通路があり、そこをぬけると寝室をかねたプライベートルームになっている。つくりつけのデスクの上には、何かを書き散らしたノ

ト類やペンがちらばっていた。

「すごいわね。外国のお金持ちが乗るプライベートヨットみたい」

「叔父の道楽です」

ボートは頼もしいエンジン音をひびかせながら発進した。藍色を帯びた海面に白い波しぶきがたち、私の島がみるみる遠ざかる。丸いこんもりとした緑の島。マングローブの林に守られるようにして、コテージの白い姿が見える。

私が日々暮らし、絵を描き、眠りについていた場所——それはあまりに小さかった。

隣りの島にはすぐ着いた。島の中心にある棧橋にとめると、矢吹君はロプを器用に杭に巻きつけると、こちらを見た。

「さあ、行きましょう」

「待つて」

私はもたつきながら、リズをうながした。リードをしつかりにぎりしめていたわけは、興奮したりリズが迷子になりそうだったから。

島は以前来た時と同じように、にぎやかだった。棧橋を出たところにすぐ、土産物屋が並び、その前の道を行つたところに市場がある。色あざやかなアロハシャツやＴシャツを着た人々がせわしなくゆきかっていた。

私が降り立ち、道を歩き始めても誰も気にする様子もない。少し、ほっとした。人々にとつて、私は何者でもないのだ。たとえ、私が少しばかり名の知れた画家だとしても。

市場はトタン屋根のような粗末なアーケードの下、薄暗い洞穴の口を開いていた。露店のような店がずらりと並び、細い通路があちこちにのびているのを見ると、迷路に入ったような気がした。そんなに広い場所のわけがないのに。

「ほら、瀬木さん」

矢吹君が一軒の店先の前で立ちどまった。彼が指さす先をみると、とぐろを巻いたねずみ色の干物のようなものが籠に入っていた。よく見ると、干物の表面には、うろこがびっしり生えている。思わず、私は顔をしかめた。

「いやだ、蛇でしょう」

「スタミナを養うのもってこいらしい」

彼がそのまま、店のおばさんに蛇の干物の料理法を聞きだしたのにはあわてた。その腕をひっぱり、行こうとうながすとようやく店先から離れた。

「本当にあんなもの食べる気だったの？」

「だって、おもしろそうじゃないですか？」

「あなたのヨットで料理できなかつたら、私のところに運びこむつもりだったんでしょ」

「そこまでは考えてなかった」

パイナップルやら、グロテスクな青の魚やら、豚の頭やらが店先に乱雑に並んでいる。土地の匂いがたちのぼるような、一種のおもちゃ箱。おもしろくはあるけれど、洗練からはほど遠い場所だ。

「ヨーロッパの市場とはだいぶ違うのね」

「アジアの市場はみなこうですよ。タイにいった時も、瀬戸物のタライの中に赤い金魚を売っていた」

リズがその時、不意にほえた。その先には、何と磯村さんがいた。磯村さ

んもこちらに気づいたらしく、驚いたように目を丸くしていた。緑のヤシの木が染め抜かれたアロハシャツに麦わら帽子をかぶっている。

「こんなところで会うなんて、びっくりしましたね」

磯村さんは、そういいながら、首にかけていた手ぬぐいで顔の汗をぬぐった。黄色いヒヨコの絵が目をはひく手ぬぐいだった。

「ひよんなことから、遊びにきちゃったわけ」

「瀬木先生がご自分の島を離れられるなんてことは、金輪際ないと思ってましたよ。何か起こらなくちゃいいですけどねえ……おや、その人は？」

矢吹君に気づいたらしい。

「ああ、この人は矢吹透君というの。私も昨日はじめてあったんだけど、旅の途中で私の島にたちよったわけ」

「はじめまして」

そこで矢吹君がていねいに頭をさげた。

「ああ、わしは磯村という者です。という事はあんたが瀬木先生をあの島からひき離すことができたというわけですな」

「いえ、そういうわけではありませんが」

「本土のどこから来なすったんです？」

「東京です」

「ほう」

東京という言葉は、磯村さんにとってはあるかかなたの土地という以外の意味をもたないらしい。

「南の島々には何もありませんが、海と星空の美しさだけはどこにも負けませんよ。瀬木先生が最初こちらに来られて、絵かきさんだと聞いた時は、

そうした自然の風景を描かれる方だとばかり思うてましたわ。でも、コテ

ジからほとんどお出にならず、変わった植物画ばかりかいておられるらしい」

「瀬木さんには独特のスタイルがあるんですよ」

矢吹君が私を振り返って微笑んだ。

「この犬もずいぶんうれしそうだね」

磯村さんがリズを見下ろした。

「いつも砂浜を歩くだけじゃ、いくら犬だといったって退屈しちまうわね。

ほれ、鼻づらはすぐくぬれてるし、目はぴかぴか光ってるじゃないか。瀬木

先生も、もっとこちらに来なさいよ」

「そうね」

「それにしても暑いな。のどがかわきましたよ。先生、それに矢吹さん。ひ

とつ、私につきあって何か飲みませんか？」

「いいですね」

私にことわりもなく、矢吹君がうなずくと磯村さんの後をついて歩きだした。仕方がない。私もついていくことにする。

磯村さんは薄暗いアーケードから小路に入り、そこにたたずんでいた古い喫茶店に入った。中はどこかハワイアン調で、周囲が薄暗いせい、朝なのに照明がともっている。ソファはスプリングがゆるんでしまい、座るとずぶ

ずぶ沈みこみそうなくらいだった。磯村さんはカウンターのの中のマスターら

しき男性に声をかけた。

「やあ、来たよ」

「はい。いつものやつでいいですよね」

「ああ、うんと冷やしたアイスコーヒーでね。先生達はどうします？」

「私は紅茶でいいわ」

「僕はホットコーヒー」

私はマスターに頼んでリズを店の前につながせてもらった。そうして、おんぼろソファに向かいあっていると

「磯村さん」

矢吹君がふいに言った。

「この島に伝統的な染物か織物をしておられる人はいないでしょうか？」

「伝統的になってあんた……。沖繩は染織の島々みたいなもんじゃからね。紅型や芭蕉布やら読谷花織とかいろいろあるが」

「ああ、それらが素晴らしい民芸品だということにはよく知ってます。でも、僕が知りたいのは、それを現代風に、自分のスタイルで作っておられる作家なんです」

「ふうん、そりや難しいことをいうね。わしは生まれた時から、この島にいるが、そんなことまで知らんよ」

そう言いながら、磯村さんはマスターの方に向き直った。

「マスター、今の聞いたかい？」

「聞こえてましたよ」

「何か思いあたることあるかい？」

「そうですね。島の北の方、ここから車で二十分ばかり行ったところにそういう染織作家みたいなのがいて聞いたことありますよ。なんでも、まだ若い女性らしいですがね。本土から移り住んで、紅型をやっているらしいですよ。でも、人が沖繩と聞いて思い浮かべるものじゃなく、彼女独特のデザインによるものだそうです。この土地からインスピレーションを得たものだから」

「それはいい」

矢吹君がうれしそうに叫んだ。

「僕はそういう人を探していたんです。ぜひ、その人に会いたい。どうか、その人の家か工房までの道順を教えてくださいませんか？」

「いいですよ」

マスターはカウンターのはしに置いてあったメモ帳をひきちぎると、簡単な地図を書いてくれた。なぜか、目印の家ところにシーサーの絵が書いてあった。

「門のところは、すぐカラフルなシーサーの置物を置いている家だから。すぐわかりますよ」

「ありがとうございます」

そこへ磯村さんがわって入ってきた。

「矢吹さん、あんたすごく熱心だが、何かそういう仕事でもしておられるのかい？」

「まあ、少し」

矢吹君はあまりその事にふれられたくないようだった。私達はちよつと黙って飲み物に口をつけた。気がぬけたような紅茶で、少しもおいしくなかった。

「磯村さんは漁師なんですか？」

矢吹君が聞いた。

「ああ、十五の時から海に出てるよ。それから五十年たったわけだが、この島もだいぶ変わったね。なんにもないとこだったのに、本土から旅行者もやってくる。それ目当てのリゾート開発もされて、きれいなサンゴ礁も破壊されてしまった」

「サンゴ礁あつての沖縄の海なのにね」

「そうですねよ、あんた。沖縄はずっと本土のために蹂躪されてきたんですよ。わしの生まれる前の年に太平洋戦争が終わったんだが、ここは米軍相手の防波堤として使われたんだ。戦後も基地を置かざるをえなかったしね」

「沖縄の歴史は通りいっぺんしか知らないんですが……」

「琉球と呼ばれていた頃から、薩摩藩にさんざんいじめられてきたんだ。特産の黒糖をしばりとるためにね。島々のあちこちにある人頭石をみたらわかるでしょうが。島にはかつての島民達の恨みがまだ眠ってるはずですよ」

「すみません」

矢吹君がそこでペコッと頭をさげてあやまった。

「あんたに関係ないさ」

磯村さんはワハハと笑った。

孫にアイスクリームを買って帰るといふ磯村さんと別れると、私達はまた港の方に行った。波止場の近くでレンタカーを借りるためだ。小さなモータープールに並んでいるのは、小型車ばかりだった。あれこれ見た後、矢吹君が選んだのは黒い日産マーチだった。

「車がないと、染織作家のところには行けませんからね」

「私、その人のところへ行くなんて言った覚えはないけど」

「まあまあ、結構面白い体験になるはずだし」

車はよく舗装されたアスファルトの道を走りだした。沿道には、コンクリートの箱のような沖縄独特の家が並び、その庭には赤いブルーゲンビア、ハイビスカスが咲き誇っていた。そして、木々のつよい緑の色と空の輝くような青。

家並みがつぎれると、一面にサトウキビ畑が見えてきた。見たすかぎりの緑の野に立っている男性とはなれたままの犬。農作業をしているのかもわからない。なんだか、眠ってしまったようなのかな光景だった。

「この道のはずですが……」

ハンドルを握る矢吹君がつぶやいた。どこまでも単調なサトウキビ畑が続き、人家らしいものが見えないので不安になったらしい。

「ドライブするだけで楽しいじゃない」

と、私は言ったが、あきらかに余計なひと言だった。

それでも、五分ほどいったところに、沖縄の伝統的な家々が石垣に囲まれている村らしいところがあり、彼は「ああ、ここだ」とその一つの前に車をとめた。

小判形の石を積み重ねた石垣の上に、赤や青や黄色で思いっきり極彩色に塗られた大きなシーサーが一對置かれていた。なるほど、これなら見まがうこともない。

石垣の奥には、平屋の家が建っていた。いまでは、ほとんどの場所で見ることのできなくなっている古民家。屋根はオレンジがかつた赤い色で、白くふちどられている。家の窓は現代風にサッシになっていたものの、その内には、光のとどかない暗闇があるような気がする。

「ごめんください」

矢吹君が声をかけると、開けられた縁側の向こうで人の影が動いたようだと、思うまもなく一人の女性が姿をあらわした。

「はい、どなたでしょう？」

首をかしげて、私達の前に立つ女性は明らかに地元の人とは違う雰囲気を持っていた。小麦色の肌をした小柄な体と強い意志力を示す広い額。髪は大胆にカットされている。

「ここに紅型の染色をされる女性がいると聞いてうかがったんですが」

「ええ、私がそうです」

「ああ、やっぱりあなたがそうなんです。よかったら、お話をうかがいたいんですが」

「今、ちょっと作業の途中なんですけど」

彼女はなにか迷惑そうに眉をひそめたが、一瞬後考えなおしたように、さっと手を家の中にさしむけた。

「どうぞ、入ってください。本当ならおことわりするんですけど、遠くからいらっしやったようですよ」

「あの、ちょっと犬がいるんですけど」

私は言った。リズを車の中に残したままなのだ。

「あら、犬を連れていらっしやるんですか。そうですね。玄関のそばにデイゴの木がありますから、その木蔭にでもつなげたら」

そういうと、女性は奥から水をくんだボウルを持ってきてくれた。かぶりつくように水を飲むリズを木につなぐと、私は矢吹君に続いて家の中に入った。

「実は、オリエントの織物に関係する仕事をしていたものなんです。沖繩の作家の方にも話を聞いてみたいと思っていたんです」

「私のは、織物でなく、染色なんですけど」

「それがかまいません。僕の関心は、織物というより、その紋様にあるので」

「私はもともと沖繩の者ではありません」

女性——高階紀子と名乗った——は語りだした。

「今から六年前、一人旅をしていて、沖繩の島々を巡ったんです。そこで見たのは、南国の自然や生活を糸の色や模様に封じ込めて、一枚の織物に作りあげる女性達の姿でした。私は大学で染織を学びましたが、京都の西陣織とも、日本各地の紬とも異なる魅力がそこにはありました。私がやりたかったのはこれだ、とその時思ったんです」

高階さんは、そこでちよつと黙った。

広い板敷の間に風が吹き抜け、縁側からは白い砂と石垣が見えた。私達の前には、冷やした茶が入ったガラスの器がおかれている。

「それまで、勤めていたデザイン事務所をやめて、私は沖繩にやってきました。最初は紬を織って見ましたが、やってみて自分には染色の方がむいているのではないかと思いました。絵をかくように、図柄をつくってみてみたかったです。と違って、伝統的な紅型のようなにぎやかなものも好みません。それで、私の選んだ道は、自分でデザインすることでした」

高階さんは立ち上がると、部屋のすみにおいてある籠から、いく反もの織

物を持ってきた。そして、それを床の上に広げて見せる。鶉色の地に四角形やギザギザの紋様がデザインされたもの、ターメリックを思わせる沈んだ黄色の地に、ポップで愛らしい貝殻や海の動物が描かれたもの。濃い藍の織物のは、小さな星状紋を幾つも不規則に並べたもの……実際に見てみると、色彩の美しさと意匠のモダンさは素晴らしかった。

「これは」

と、彼女は藍の地の反物を指さした。

「南十字星をあらわしたものです」

「うん、これはすごいな」

矢吹君はまじまじとこれらの織物を見ていた。

「この形は何をあらわしているんですか？」

彼は四角形にとがった角が生えているような模様を示した。

「ああ、それはシーサーです」

「へえ」

そういわれてみれば、シーサーの頭の見えないこともない。

「ひよっとして、高階さんはトルコのキリムに興味があるんじゃないかな？」

矢吹君が変なことを言い出した、と思うまもなく高階さんの顔がパツと輝いた。

「ええ。私、昔からキリムが好きです。小さな敷物も持ってます。実いうと、このシーサーの頭はキリムの有名な紋様の一つである『羊の角と狼の口』から着想をえたの」

「うん、僕もそうだろう、と思いました」

二人の話題についていけず、私はつい口をだした。

「羊の角とか狼の口って一体なに？」

「羊は遊牧民にとって貴重な財産でしたから、これをキリムに織り込むことで、羊がふえ、自分達の生活が豊かになることを願ったんです。狼の口はその羊をねらう狼に対する魔よけの意味合いがあるみたいですね」

「どうして、あなた、そんなことまで知ってるの？」

「だって、僕はキリムやペルシア絨毯を輸入するギャラリーに勤めていたんですから」

それは初耳だった。

「まあ」

そこでうれしそうに叫んだのは高階さんだった。

「私、ずっとトルコやイランに行ってみたいと思ってたんです。いいなあ、お仕事だったら、何度も訪ねたことがありませんね？」

「ええ。僕はあの国が好きです」

不意に高階さんは私を見た。

「あの、ひよっとしたら、画家の瀬木容子さんではないですか？」

私はそうだ、というかわりにこくりとうなずいた。

「やっぱり。私、瀬木さんの絵のファンなんです」

「瀬木さんはお隣の小島に住んでるんですよ」

矢吹君が説明した。

「えっ、八重山に住んでられるんですか？」

「二年近く前からね」

私は面倒くさくなつて、そっけなくいった。

「そんなに前から……。全然知りませんでした。でも、どうしてこんな所に？」  
「心境の変化」

「そうですか」

彼女はそれ以上深入りしてこなかった。いい人だ——なかば強引に矢吹君にここまで連れてこられて、私はすこし不機嫌だったのだが、なんだか心がじんわりしてきた。

私はその場を離れて、部屋の片隅に行ってみた。そこは、工房になっていくらしく、机の上には紋様の型紙、顔料らしき染料の瓶、まだ途中まで手をつけたきりの紅型が置いてある、描かれているのは、青い空に映える赤いハイビスカスと白い雲だ。

そばには、織り機もあって、細らしいものが織りあげられつつあった。織物も少しはしているらしい。

そこからは、タイルのはられた流しや小さなテーブルの置いてある台所も見えた。からりと乾いて居心地のよさそうな雰囲気。板敷の間からは、深い軒をもつ縁先が見わたせ、涼しげな風鈴がぶらさがっている。

それらを見て、ふと思った。高階さんは一人暮らしなのだろうか？ここには、不思議な安らぎと静けさがある。

「こんな離島に突然やって来るなんて、勇氣ありますね」

矢吹君がそんなことを言っている。

「ええ。最初はびっくりすることばかり。隣りの家に朝早くから行列が並ぶのでなんだろう？　と思っていたら、その家のおばあさんがユタなんだそうです。おおまじめに、霊から聞いたと言って、病気を治したり、悩み相談をひきうけたり。ほんとかどうかわかりませんが、私は絶対いきませんね」

「非科学的なものは信じないですね」

「でも、こうやって、昔ながらの家に住んで、土地の織物に染色をほどこしていたら、「この島に生き、死んでいった幾多の女性達が私の中に入りこんで、織物に生命を与えてくれるのを感じ取るんです。そうでもない」と

そこで、高階さんは、きっぱりいった。

「この土地とは何のかわりもない私に、土地の魂を宿す工芸品がくれるはずありませんもの」

彼女の顔には光るような美しさがあった。信念をもって生きる人の顔だ。

「ここには、独特の光と風と空気があります。私の仕事は、それを一枚の布として仕上げていくことだと思っています」

「お会いできて、うれしかったです。瀬木さんと僕のいる島にも来て下さい」

矢吹君は、彼女に名刺をさしだした。

家から出ると、強い日ざしが網膜につきささるようで、まぶしい。待ちくたびれたらしいリズが、とびついてきた。

「真っ黒で夜のような色がすてき」

高階さんは、リズの背中をなでた。

「瀬木さんによく似た犬ですね」

これはよろこんでいいのか、わからない。

手をふる彼女の姿が石垣の向こうに消えた時、私は矢吹君の方を向いた。

「あなたの仕事が織物や絨毯を扱うものとは知らなかったわ。だから、さっきの高階さんの所にも行こうと言ったのね」



「ええ」

矢吹君は、まっすぐ前をむいたままだ。

「でも、その話は島に帰ってからにしましょう」

車をレンタカー屋に帰し、島まで再びボートで帰る。海は、朝の輝くような明るさから昼下がりのものうい色に変っている。そこで、私はおなががすいているのに気づいた。考えてみると、お昼を食べてない。

私達はしぜんコテージに向かうと、キッチンのテーブルに向かうとパンを焼いて、コーヒールと一緒に食べた。

「瀬木さんの絵に僕が惹かれたのも、キリムの紋様に似ていたからです」

「キリムの紋様……」

「遊牧民達は、自分達の世界を曼荼羅のように織物に組み込みました。ペルシア絨毯なんかでも、素晴らしい模様が織り込まれましたが、それは完全にデザイン化されたもので左右対称のものです。でも、キリムは違う。即興的なもので、織り手の気分のままにつくられ、対照とはなりません。だから、織り手は同じでも、同一のキリムは再現できないんですよ」

私の絵がキリムに似ているというのだろうか？その絵に描かれたものは、私の心にある植物園に生えているもので、遠い田舎の家にもルーツをもつものだった。

その故郷は信州の小都市に近い古い街道に面していて、里山にかこまれた一帯だった。その地方一の都会に出るには、車で一時間ほどいかねばならず、私達の家はまったく都市生活から隔絶された山村のそれだったのだ。鄙びた家の縁先には、祖母が丹精する山野草や桔梗、ホタルブクロ、スミレなどの咲くつつましい庭があった。

家の前には時折車の通り過ぎてゆく細い道があり、周囲にひろがる緑の山々をバックにして、この小さな庭は天使のえくぼのような魅力を持っていた——と子供の私には感じられたのだった。

小学校に入るか入らないかの頃から、私は画用紙を画板にはさんで、その庭の絵をかいた。鶏頭の赤や薊は好きでなかったせいかわからぬ、それらを描いているうち、本来の鶏頭とは違う、やや幻想味をおびたより美しい花に変わっていった。絵の中に描かれる祖母の庭はいつしか、私の中でこの世のものならざる庭園のようになっていった。

庭の植物たちが、どうしてそんなに私をひきつけたのかわからない。あるいは、そのころから、植物と私の間に不思議な交感がおこっていたのかも知れない。

ある日、庭の垣根につるをはわせていくノイバラを見た。その二つはからみあうことで、より複雑な美しさをつくりだしているようだった——それ以来、唐草模様はずっと私のテーマとなったのだ。

そういうようなことを、私は矢吹君に説明した。

「なんだか、すごく素敵な庭のようだ」

「今は、もうなくなっただけ」

「僕は、高層マンションで育ったから、庭なんてものを知らないんです。緑なんてものには、縁がなかったなあ」

それにしても、植物の名前をよく知っているではないか、と言おうとしたらこんなことをいっただした。

「こんな仕事をしだして、トルコへ旅にでることになりました。行ったさき

は、砂漠地帯で、なんにもない。あちこちにポツポツとやせた木が立っているだけです。どこまでも、つづくそういう景色を見ていたら、なんだかこつちまで気持ちが悪さついてくるようになったね。その後、イスタンブールへいったら、街のあちこちに泉や緑がある。その時、体が内側から潤ってくるようになった。あの時のことはわすれないなあ」

「でも、ここみたいに、緑の勢いが強いとうるさく感じられるわ」

「まあ、それも魅力だと思いますけど。それより、今日は瀬木さんが島の外に出た記念日です」

「ああ、そうだ」

「外の世界は思ったより悪くなかったでしょう？」

「ええ」

そこで、私達はだまってコーヒーをすすった。

矢吹君が島にあらわれて一月ばかりだった。私とリズの生活もすっかり変わってしまった。単調で静かな生活に、突然小さな旋風がおこったように。

朝、私達は浜辺をジョギングすると、一緒に朝食を取る。そして、昼間それぞれ時間を過ごしたあと、ポーチのテーブルについて星空の下、夕食を食べながら長く話す。子供時代のこと、旅した場所のこと――。

けれど、私が用心深く話さずにいたこともあった。それは、ふれることを禁じられた書物のように、私の心の小部屋にしまいこまれていた。

「ここにいると、時間が流れていないようですね」

矢吹君が、ポーチの手すりに手をかけながらいった。その手には月あかりがおちて、青白く光っていた。

「TVもないし、時計もない」

「時計はあるわ」

「ないようなものでしょう。でも、無人島がこんなに心安らぐ場所だとは思わなかったな」

「じゃあ、どう思ってたの？」

「船が難破して、たどりついたところがたいい無人島で、生き残るためにさまざまな冒険をするというイメージ」

「すごく陳腐ね」

「私はあきれた」。

「でも、こんなところにいたら、なんだか自分が仙人にでもなったみたいで楽しい」

「島ってロマンチックなイメージをかきたてるものがあるんじゃないかしら？ ガラスの瓶につめたメッセージを海に流すとか、小さな灯台で働いている灯台守とか」

「それこそ陳腐じゃないですか」

「でも、いいの。自分の好きな場所にいられてすてき」

その晩、ベッドに入ると、しぜん天窓に顔がむいた。一日の終わりには必ず見ていた、四角にふちどられた星空。それは今日も漆黒の天蓋とそこにぬいつけられたビーズのような星達を映し出している――その時、私は気づいた。夫のことを思いださなくなっていることに。彼のやせた顔、独特のただようような歩き方などが遠く思われた。この天窓はこことアメリカの空をつ

なぐ天の回廊だったのに。

私は、闇の中、目をこらして窓を見つづけていた。そうだ、私はみとめなくてはならない。夫を忘れることはできなかつたことを。彼の存在をいつも、心のどこかで感じていたことを。

それが、どうしたというのだろう？ 薄い霧のようにただよっていたはずのその気配が感じられなくなっている。

「周囲が急にさわがしくなつたせいかしらね？」

私はベッドの下に座っているリズに向かつて話しかけた。リズは、前足をきつちり並べて座り、黒く輝く肢体を闇の中に浮かびあがらせている。茶色の瞳が金色の輪を浮かべてきらめき、なんだか今夜のリズは古代エジプトのヌブス神のようにも見える。でも、あちらは両耳がたっていたっけ。

数日後、すごい風のうなりが聞こえてきて、目がさめた。ベッド脇のテーブルの時計を見ると、午前五時四十五分。

「こんなに早く起きたのは久しぶり」

でも、起き上がって、カーテンを開けた私はそんなのんきなことを言うてる場合ではないことに気づいた。ガジュマルの木々が大きくゆれ、枝が風にちぎれそうだ。滝のような雨が窓にはげしくたたきつけている。空は暗い鉛色で、嵐の予兆を遠くから運びこんでいた。

「こうしちやいられないわ」

矢吹君をこの家に避難させなくちゃならない。そう思って、着替えはじめた私は、もう一つ重大なことに気づいた。

リズがいない。いつも目覚めた時は傍らに居るはずのリズが。あわてて、一階におりたものの、廊下にも居間にも、キッチンにもあの黒いシルエットはなかった。しんとした静けさがどの部屋にも、広がっているばかりだった。

そうして、私は見つける。キッチンから外に通じる通用口が開いていることに。うっかり閉め忘れたのだろうか？

こんな嵐が来るといふ時に、外へ出たらどうなるだろう？ サンダルをはいて、急いで外に出た私は、海の方から吹いてきた突風に思わずよろけた。まず、矢吹君のところに行かねば……私が浜辺に足を踏み入れた時、向こうから彼がやって来るのが見えた。

「やあ、瀬木さん。すごい天気ですね。朝だというのに、夕暮れみたいに暗い」

落ち着いた口調だった。

「ああ、矢吹君。無事でよかつた」

「船を、あなたの言つたたガレージに置かせてもらいました」

だが、私は彼の言葉をさえぎるように言った。

「リズがいなくなつちやつたのよ」

「えっ？」

矢吹君は目を見開いて、私を見た。

「朝起きたら、キッチンの出入り口が開いていて、そこから外に出たみたいなの。どうしよう、こんな日にいなくなるなんて」

そういつたとたん、目からぽろりと涙がでてしまった。

「落ち着いてください」

彼は、私の手をしっかりと握りしめた。温かな体温がじかに感じられて、私はしだいに落ち着いてくるのがわかった。

「この島にいるはずだから、すぐ見つかりますよ。まず、あなたのコテージの横の林を探してみましよう」

「でも、風がすごいから、木が倒れてくることだってあるかもしれない。あぶないわ」

「大丈夫。なんとかかなりますよ。僕が探しに行くから、あなたはコテージで待っていてください」

「私も行くわ」

私はきっぱりいった。

「リズは私の犬だし、こうして迷子になったのは私にも責任があるんだから」

「じゃあ、一緒に」

私達は、林にとびこんだ。傘は役にたたないので、レインコートだけをほおった格好で。

亜熱帯の暗い緑が繁茂する林の中は、叩きつけるような雨の下、猛々しいほどの精気を発していた。シダやその仲間らしきギザギザと尖った葉を持つ逆三角形の植物が地表付近をびっしりと覆っている。木々には、蔓を思わせるつる植物がからみつき、その触手をさらに上に伸ばそうとしているところだった。

林に入った時、私は植物たちがいっせいにこちらを見たような気がした。、キケン オマエタチハキケン——こんな信号のインパルスを交わしあっているような。彼らにとつて、私達は闖入者なのだろうか？ 緑の濃い大気が一帯に充滿していて、私は少し息苦しくなったほどだ。この植物達の生命力と意志に比べたら、私の描くものなんて、人工的な園芸種の亜種にすぎない。

地表を覆う葉をかきわけようとして、気づく。リズがこんな所にいるわけない。いるとしたら、蛇だろう。

「雨がすごくて、前もよく見えませんが、もっと奥まで行ってみましょう」

矢吹君が先に歩きだした。顔にも雨がたたきつけ、視界はぼやけて見える。

足にぬれた植物の感触がまとわりついて、気持ち悪い。シダの群れをふみしだいていくと、どこかで犬の鳴き声があった——ように思った。

「ねえ」私は思い切っていった。

「あの声、聞こえた？」

「うん。あれは絶対リズだよ」

耳をすますと、風雨の激しい音の中、ウオン、ウオンという悲しげな鳴き声が確かにした。声をたよりに進むと、いきなり、ぽっかり開けた空き地のような場所に出た。というのか、木々が密集した空間がとぎれて、草地だけになっていいる一角。

リズはその真ん中にいた。どうやら、動けないらしく、私達を見ると訴えるように鳴くものの、そこにかたまったままだ。

「どうしたんだい？ リズ」

矢吹君が近寄っていくと、その理由がはっきりした。驚いたことに、リズのそばには古い切株があって、彼女のリードがその割れ目にしっかりと食い込んでしまっていたのだ。

「どうやら、嵐でパニックになって飛び出したんでしょね」

「はやく、連れ帰りましょう。ここは気味がわるいわ」

「そうですか？」

不思議そうにいう矢吹君。あなたには、この植物達が威嚇しているのが感じられないのか？ と私は思ったがここは早くリズを自由にやらねば。リードを株から離すと、私は彼女を抱きしめた。

コテージに帰りつくと、私達はレインコートをぬぎ、体を大きなバスタオルでふいた。リズの体もタオルでごしごしふいてやり、ミルクをあたたため、ボウルに入れるとむしゃぶりつく勢いで飲んだ。

「あなたは、これを着て」

私は矢吹君に浴室の戸だなからバスローブをさしだした。彼が着れそうなものは、それしかなかったのだ。

「ありがとう」

彼は受け取ると、浴室で着替えてでてきた。

風のうなりはますます激しくなってきた。木々が悲鳴のような音をたてるのが聞こえた。私はキッチンでトーストを焼き、その上にバターをのせた。

冷蔵庫からヨーグルトを出し、ブルーベリージャムをその中にまぜる。そうして、ポットに紅茶をいれると、私達のための食事ができあがった。

「すっかりした家ですねえ」

矢吹君がトーストをほおばりながらいった。その視線は窓の外にむけられている。コテージは、外からの執拗な攻撃にもまるで動ぜぬように、すくくと建っていた。まるで、ここが暖かな木漏れ日のさす森の中かなにかのように。

「だって、その道の第一人者に設計してもらったんだもの。台風OK、地震だってよっぽどのことがない限りOK」

「最初見た時から不思議だったんですが、この家はこの地方とはまるでそぐわない建築ですわね」

「アメリカにいた時、暮らしていた家をモデルにしているの」

「ああ、そういえば北米の建物そのままですわね。もともと、実際に見たことはないから、写真のイメージなんだけど」

「なぜだか、沖縄の人達が住むコンクリートの家を建てる気にはならなかったの。まるで要塞みたいな感じがして」

「アメリカには長く住んでられたんですか？」

「七年間」

私はポツンと答えた。そういうと、その七年の月日がいちどきにおしよせて苦しいほどだった。

「あなたのアメリカ時代の話は聞かせていただいたことはありませんね」

「話したくなかったから」

「話した方が楽になることもありますよ」

そこで、私はうるさい、よけいなお世話だということもできたはずだった。でも、矢吹君の態度には好奇心やおせっかいかいさというものは感じられなかった。その静かな瞳を見ると、私は開かざるをえなかったのだ。閉じられたままの封印を――。

「私がアメリカにわたった時、まだ二十歳だった。高校の時、出会ったジョージア・オキーフやデニス・ホッパルの絵に見る大陸的な乾いた質感に惹き付けられたの。特にオキーフの絵は衝撃的だった。大きなキャンバス一面にクローズアップされた花——まるでモンスターにみえるほどの存在感だったわ」

矢吹君は黙って聞いていた。

「そうした絵をみていたら、アメリカに自分の求めるものがあるだろうと思っただの。日本で学ぶことはすごく退屈に思えた。だから、思いきって飛び出すことにしたわけ。……今でも、アメリカへ発つ日の夕暮れのエアポートを覚えてるわ。滑走路に灯る真珠の粒のような照明灯を見ながら、これから行く大陸を思って胸をはずませていたことを」

私が留学したのは、カリフォルニアの郊外にあるアート・オブ・クラフト・スクールだった。高いヤシの木の並木が続く大通りから外れた池のある公園の中、こんもりとした森のような緑に囲まれた美しい学校だ。絵画科、工芸科、彫刻科と三分野の学科にわかれ、それぞれの棟は長い渡り廊下で結ばれていた。

全米はいうにおよばず、アジア、オーストラリア、ヨーロッパからも生徒が集まり、スクールの中はとも国際色豊かだった。私も絵画史、色彩理論を始め、デッサンなどを夢中で学びはじめたものだ。

それは入学して二カ月ばかりたった秋の終わりごろの事だった。渡り廊下の窓から見える照葉樹の葉は黄金色や赤色に色づき、風が梢を揺らしていた。

美術史の授業は、有史以前からの人類の手の営みをスライドを交えて語ったものだった。音楽・文学・絵画の三大芸術分野のうち、最初にあらわれたのは絵画だ、という白人教師の言葉を私は苦勞しながら、ノートに書きとめていた。私の英語力は専門用語がわかるなんていうレベルではなかったから。

その時、隣の席から低い声が話しかけてきた。

「ねえ、退屈だろう？」

驚いて横を見た私の目に映ったのは、一人のすらりとした東洋人の青年だった。鼻梁が高く、引き締まった口元と考え深そうな瞳を持っている。彼の顔をまじまじと見て、第一印象の東洋人という印象が少しくずれかけるのを、感じた。顔立ちが生粋のアジア人種とは違うようだし、瞳も黒というより、曇天のようなグレーにちかい。私はその素晴らしい瞳から目をはなすことができなかつた。後で知ったことだけれど、彼は日本人とアメリカ人のハーフだった。

「君、日本人だね？」

彼はたまたみかけるように言った。それは質問するというより、確認するよ

うに聞こえたものだ。

「ええ」

「何コースをとってるんだい？」

「絵画よ」

「そう。僕は工芸科だ」

それから授業がすむまで、彼は何もいわなかつた。ようやく、教授の講義が終わり、学生達が席を立ち始めた時、彼は私の方を振り向いた。

「もつと、いろいろなことを話さないかい？」  
彼——シン・テイラーとの出会いだった。

知り合ってから、私は彼が素晴らしい才能のある芸術家であることを知った。シンは学校の近くのガレージを改造した家を借りて住んでいたが、はじめてそこを訪れた日のことは忘れられない。

明かりとりの窓が上にあけられただけの薄暗いガレージの中に、彼の作品はあった。優美なシルエットを描く壺はオレンジがかかった茶色に輝き、その表面には黒く彩色された人物像や動物、鳥の絵が描かれていた。

どこかで見たような図柄とデザインだと思い、次によく思いあたって。

「古代ギリシアの『赤絵』の壺ね」

「そうだ」

私はシンの手を見つめた。繊細な形をした指はそれ自体が、一つの美しい生物のようだった。この手が、あの壺を作りあげたのだ——多分、その瞬間私は彼に恋していたのだと思う。

私達はその時以来、ずっと一緒だった。自分たちは互いのものだと信じていたし、お互いの世界を尊重しあっていた。シンは学生の頃から、多くの賞を受賞し、気鋭の陶芸家として知られるようになっていた。

スクールを卒業した後、私達は結婚し、太平洋をのぞむ海岸そばのコテージに住んだ。コテージの一部屋を私のアトリエにし、家の脇に窯場をつくって、シンは作陶をはじめた。そうして、数年がたつ頃、私は自分とシンの間に不透明な空気が流れ始めたのを感じたのだ。

もともと、シンは複雑な人だった。明るく陽気にふるまっているかと思えば、すうっと黙りこみ、自分の殻にこもってしまう。彼の心の中には、誰もふれることのできない深い湖があるようだった。それが、彼の魅力をつくりだしていたのだろうが、そのうち、私とのコンタクトも避け始めた。

行き先をいわない外出がふえ、黙々と壺や水差しに絵付けをする時も、私の意見を聞くことはなくなっていたのだ。

そうして、ある日の夜、潮風の流れ込むポーチに座っていた時、シンが言ったのだった。

「もう、愛していない」と。

私は茫然とシンの、夫の顔を見つめた。まだ若々しい青年の顔。だが、あのグレーの瞳には、かつてなかった陰りがあった。

「というより、妹に対するような感情しか抱けないんだ」

夫はそれ以上言わなかった。それと時を同じくして、彼の作品がバツシングされはじめた。著名な美術評論家が名指しでシンを批判し、古代の陶器の安易な模倣とまでいったのだ。その評論家は、当初シンを絶賛していたはずだった。

シンはショックをうけ、自分の道を模索しはじめた。そして、独自のスタイルをもった工芸品を作りだそうとしていたところ、そのデザインを親しい友人に盗まれてしまった。この裏切りは彼をうちのめしたはずだ。

そして、あの日——私が外出先から帰った時、浴室に彼がいるのを見つけた。浴槽と床を血だらけにして。鮮烈な赤色の中で、くずおれたシンの青ざめた顔をみただけで、なにもかもが終わったのだとわかった。

葬儀の時、はじめてシンの母親であるテイラー夫人に会った。実をいうと、彼女に会うのはそれが最初だった。フロリダで悠々自適の生活を送る夫人は、

私達の結婚式にも姿を見せることはなく、祝いのカードをよこしたきりだったのだ。

この小柄な日本女性は、私に向かってこういった。

「こんなことになってしまったのを、私はあまり驚いていないんです」

そうして、シンの父親であるテイラー氏も自殺したことを教えてくれた。

「あの二人はよく似ていました。優しくて繊細な半面、心が折れやすくすぐ自分の中に沈み込んでしまふところも。シンは昔から、とても感受性の強い子で、表現することだからうじて心のバランスをとっているところがありませんでした」

そこで、私は夫が死んではじめて、彼が大量の精神安定剤を飲んでいたことを知った、といった。

「あの子は、心の弱さを見せたがらなかったのですね。救いを周囲に求めることが出来る性格だったら、死ぬこともなかったでしょう。バツシングも原因だったでしょうが」

テイラー夫人は、そこで私を見つめた。彼女は、暗に私を責めているのだろうか？ でも、それ以上彼女は何もいわなかったし、私も言わなかった。

皮肉なことに、シンが死んでから、彼の作品は一層高く評価されるようになっていた。「現代に甦った古代ギリシア」、「不世出の工芸家」といった讃辞の言葉とともに、遺された作品の価値は何倍にもはねあがっていた。それを見ながら、何てむなしかったらう。アートの価値なんて、実はとてもいいかげんなものなのだ。モダンに飾り付けされた屋敷の一角におかれた、シンの壺を思い描くと悲しくさえなった。

そうして、私はアメリカを去ったのだ。

「このコテージは、御主人との思い出でもあるんですね」

「そういっていいのでしょうかね」

「御主人の作品は、ここにはないのですか？」

「ほとんど、アメリカにおいてきたの。それに、この島に持ってきたのはたった一つだけ」

そういって、私は二階の寝室のベッドのわきのテーブルの引き出しから一つの小箱を取りだしてきた。たばこ箱くらいの大きさの小箱は木できており、その表面には、ギリシア神殿の内部が描かれていた。床には竖琴がおかれ、神殿の柱のあいまからは古代の空が見える。小箱の外枠をぐるりと囲むのは、アカンサスの葉の唐草模様だ。これらの絵と色彩が、素晴らしい精緻さで織りなされている。

「ああ、とても綺麗だなあ」

矢吹君はため息をつきながら、手のひらの小箱を見つめた。まるで、宝石でもあつかうかのような手つきで。

「これを見たら、御主人がどんなに腕のいい工芸家かってことがわかります」  
「中には何も入っていないの。シンが——夫が、私の誕生日に贈ってくれたものなんだけど、ぴったりのものがあったら大切にしまおうと思って、それつきり」

一瞬、「ハッピー・バースデー、ヨウコ」の言葉とともに、小箱を渡してくれたシンの笑顔がよみがえってきた。カリフォルニアの天国のような空、日



をうけて輝くグリーンの芝生——私達がとても幸福だった時代のことだ。

「じゃあ、お返しします」

「ええ」

受けとった小箱を私は廊下の壁のくぼみにおいた。しまいこむより、こちらの方がいい。

「すごい嵐ね」

思いだしたように、私はいった。外は鉛色の空が広がり、そのところどころの裂け目から、ピンクや金色がのぞく、という不思議な空模様だった。玄関のそばに金糸雀色のトランペット形の花を咲かせる樹木があったが、大きく風に揺れている。

「あれは金鈴樹きんれいじゆですよ」

矢吹君が教えてくれた。

「瀬木さん。あなたが、この南の島に閉じこもってしまったのも、御主人のことが尾をひいているからですね」

その言葉はふいをつく、という感じではなく穏やかに話されたものの、私はびくつとしてしまった。

「自分のつくりたい作品とは違った、世間の商業主義がいやになってしまった、とおっしゃられました。御主人の死をもたらし了一連のできごととも重ね合わせていらつしやるのでしょうか？」

確かその通りかもしれない。でも、本当の理由は他にある。私はそれを言わなくてはならないだろう。

「ええ。あなたのいうとおりかもしれない。でも、実をいうと私は自分を許せなかったの」

「えっ？」

「夫が精神的に苦しんでいたことはわかっていたはずなのに、私は慰めようとしなかった。それどころか、腹をたてていたの。彼が自分のうちにこもってしまったって、私をその中にいれようとしなかったことに。もう私を愛していないといったことにもね。そして、シンは死んだ。彼が死んだのは、私のせいだわ」

「そんなことはない」

矢吹君はきつぱり言った。これほど、明らかかなことはない、というように。「御主人が死んだのは、あなたとは何の関係もない。人が心に抱えている絶望や苦しみは、その人がその重みに耐えられるかどうかで、傍らの人にもどうすることもできないんだよ」

何も特別なことが言われた訳ではないのに、その時私は楽になったような気がした。はつきりそうと意識しなかったにせよ、私はシンの死に責任を感じていたのだ。

その日一日、私達はコテージで過ごした。私は絵をかき、矢吹君は本をひろげ、リズはうつらうつら眠って。晩になると、居間のソファにタオルケットとクッションを持ちこんで、矢吹君は眠ることになった。

真夜中、一度足音をたてないようにしながら、階段を下りて、居間をのぞくと、かすかな照明の落ちるソファの上で矢吹君はぐっすり寝入っていた。そして、そのひざの上に頭をのせ、よりそうように、リズが眠っていた。

その電話のベルが鳴ったのは、昼さがりのものういような時間帯だった。ジリジリ、と静かな室内に鳴り響く電話の受話器をとった私の耳にとびこんできたのは、知人のギャラリーオーナーの声だった。

「瀬木先生のお宅ですか？　こちら青山のギャラリーSの牧村ですけど」

「はい。何の御用かしら？」

「ああ、実はですね。うちに置いてあった先生の絵が数点とも売れてしまったんですよ。それで、新しい作品がありましたら、買いたいんですが」

この性急さ・単刀直入さはこのオーナーの癖だ。

「ええ。こちらに来てかきあげた絵なら十点ばかりありますけど。よかったら、何枚かよさそうなのお送りしましょうか？」

「いや。私がいかにこの目で見て決めさせてもらいます」

「実際につて……」

「私が先生の住んでらっしゃる島まで、足を運びます」

その口調には、熱心さというよりわざわざ来てやるのだ、といわんばかりの尊大さが感じられた。

「わざわざ来てもらうにしても、私の住んでいる所は辺鄙な離島よ」

「かまいません。数日ほど時間をとって、こちらにうかがいます。そうですね。今月の終りごろあたりはどうでしょうか？」

まだ来ていい、とも言っていないのに、すっかり自分のスペースで話をすすめている。私は内心腹をたてながら、それでも口調は丁寧にいった。

「来たい、とおっしゃるのならどうぞ。ただし、私の住んでいるのは小さな孤島ですから、最寄りの島からボートを出してもらわなきゃ来ることはできませんよ。それと、この島に来てから作風が少し変わったと思いますから、期待外れかもしれないわ」

「先生にかぎって、そんな事はありませんよ」

牧村氏は確信をこめて言い放つと、電話はそこで切れた。彼の押し強い人柄や商人としての抜け目なさを思いだし、近いうちに会わなくてはならないかと思うと不快だった。

ぼんやりと電話の横の壁にかけたカレンダーを見てみると、矢吹君が突然入ってきた。私のびっくりした顔を見て、恐縮したようだ。

「すみません。ドアをノックして、声もかけたんですけど返事がないので、勝手にはいってしまいました」

「どうしたの？」

「実は、この間訪ねた高階さんから連絡があって、明日ここに来たいとおっしゃってるんです」

「高階さんが？」

私は矢吹君の方に体を向けた。彼は、ピンストライプのシャツと木綿のパンツを身につけ、いつもより成熟した年齢に見える。

「皆で、バーベキューを楽しんでもいいんじゃないかと思うんですが」

「そうね。ありあわせのものでいいなら」

「じゃあ、彼女にそういっておきます。あとは、僕がボートで送り迎えすればいいだけです」

「明日が楽しみだわ」

そう言ったものの、高階さんにまた会うことになるとは思ってもみなかった

た。以前、会ったときの彼女のたたずまいを思いだし、その背後から、デイゴの木に守られた古い家が浮かび上がった。

その翌日の午後、高階さんは本当にやってきた。デニムのスカートに青いシルクのブラウスをはおった格好の彼女は、好奇心いっぱいという様子でコーディネートの中を見まわした。

「私の住んでいる古民家とは全然違いますね。あちらは、南方の暮らしが家全体にしみついていているのに、こちらは生活の匂いがまるでしません」

「高階さんの家にお伺いした時、光と影のコントラストが強くて、それが印象に残ってただけ」

「えっ。そうですか。いわれてみれば、ここでは窓から入ってくる日の光ももっと優しいですね」

「なぜか、そうなの」

その時、矢吹君がいった。

「瀬木さん。一度、あなたの描いている絵をみせていただけませんか？」

「そういえば、まだ一度もアトリエを見せたことはなかった。私はちよっと迷ったものの、二人をアトリエに案内することにした。」

海に向かって大きく開けられた窓。それに向かうようにして、イーゼルがおかれ、その上にかきかけのキャンバスがある。私は、二人にそれを示した。「花を紫一色であらわしたんだけど、影絵のような効果がでてるんじゃないかしら？　そして、その周囲を照葉樹林を模した樹木のレリーフでかこむことにしたわけ。レリーフの装飾的などころと簡素な花の部分のミックスしたら、おもしろいんじゃないかなと思っただけ」

矢吹くんは、熱心にのぞきこんでいたがやがていった。

「瀬木さんの絵には必ず、どこかに植物紋様があしらわれていますね」

「これは矢吹君が言っていたことと重なるけれど、古来人は植物紋様であらゆるものを装飾してきたわ。キリムやペルシア絨毯もね。以前、興味があった中世ヨーロッパの写本を調べたことがあるんだけど、金箔やラピスラズリで美しく彩色された頁の細密画や文字のまわりを囲んでいるのも、ブドウの葉などのふちどりだったわ。植物のレリーフが美的に美しい、目に快いというのわかる。でも、私にはそれだけじゃないと感じられたの」

「それは何ですか？」

「植物が根や葉をのばしていく旺盛なエネルギー……それが人々の目には生命力を讃える象徴として映ったのだと思うの。だから、葉の外にも、花や実の図柄がかきこまれたのよ」

矢吹君と高階さんは、そこでそろってうなずいた。うまく言葉にできていないような気がしたのだけれど、すっかりわかってくれたらしい。

「実は、僕はキリム輸入の仕事を続けていくべきか迷っているんです」

矢吹君が突然そんなことを言った。ためらいがちな低い声で。「というの、僕が理想とする遊牧民のキリムは、今ではなかなか手に入らないからです。遊牧生活もかつてほど見られなくなっただけだし、どうしても染めむらのできてしまう草木染めよりも、化学染料で染めた方が均一にきれいに染まる。だから、化学染料で織り手に染めさせる業者も多くなりまし。そうして、時間も労力も非常にかかる羊毛の手紡ぎのかわりに、機械紡ぎが普

通のことになった。その結果、キリムからはかつての味わい深さ、奥の深い美しさが消えました」

手をかけた方が必ずしも、美しいものや傑作が生まれるという訳ではない。けれど、民族の魂がこめられた工芸品から、手の記憶がなくなってしまう時、その生命の灯も消える。

「この三十年ほどで、キリムの知名度は飛躍的に広まりました。マーケットの窓口が広くなればなるほど、商品の質が低下するのは仕方ないことです。でも、僕ははじめてトルコを旅した時にみた八十年前のキリムの美しさを忘れることはできないんです」

「古いキリムだったのね」  
高階さんがつぶやいた。

「ある民家のほのぐらい土間の壁にかけられていました。茜で染めた地に藍の染料でシンプルな模様が織られていたものです。その家の曾祖母にあたる女性が、まだ娘時代に織ったものだということでした」

「あなたが美しいと思い、魅せられるようなキリムは今ももうない、という訳なのね」

私がそう言うと、矢吹君はあわてたように言った。

「そういう訳ではありません。今だって、素晴らしいキリムはいっぱいあります。できるだけ昔のやり方でキリムを制作するのに、高いコストを払い、良心的な値段で市場に出そうと努める業者もいます。ただ、僕がこれからもキリムの仕事をするなら、もっと文化の奥深くに足を踏み入れていく覚悟でかからねばならない、とそういう意味です」

「お二人ともすごいわ」

高階さんが瞳を輝かせた。

「自分のスタンスがはつきりしていらっしゃる。それに比べたら、私はまだまだだわ」

陽が水平線から半分ほど顔をだしているだけになっていた。オレンジがかった黄金の光が海面と空を染めあげている。デイゴやオキナワチヨウチクトウの木々にも、金の光がこぼれおちていた。甘いような郷愁を感じさせる、南国の夕暮れだった。

バーベキューをするといっても、何の用意もしていない。そこで、おにぎり、天ぷら、卵焼き、焼きウインナーといったバラバラなメニューを皆で作ることになった。

キッチンに入ると、お米をとぎ、天ぷらにする野菜を切る。なんだか、うんと昔の学生時代の家庭科の調理実習の時間を思いだす。こんな風に皆でごはんをつくるなんて体験は、本当に久しぶりだ。

「おにぎりには、梅干しとおかかを入れようかしら？」

私が言うと、

「僕は塩むすびがいいな」

矢吹くんが答える。

かぼちゃ、ゴーヤー、なす、さつまいもの天ぷらがほんのりとした焼き色とともに揚がり、少し形の崩れてしまった卵焼きと一緒に食卓にあがった。それにワインもそえる。家の外はもう濃い紺色の闇だった。

私達はしばし、ものも言わずに料理を口に運んでいた。リズムもテーブルの下に座ってお相伴し、小さく切ったウインナーやら卵焼きやらを食べている。

「おいしいわ」

高階さんがほえんだ。

「高級レストランのディナーより、こういう方が好き」

「レストランで食べたのなんて、遠い昔のようだわ」

私はつぶやいた。本当にそんな気分だった。真っ白なテーブルクロスや銀のカトラリー、給仕するボーイなんて現実のことだったのだろうか？

「失礼ですが、矢吹さんはおいくつなんですか？」

「三十二才です」

「あっ、やっぱり。私も三十二です」

同年齢であることを発見した矢吹君と高階さんは、そこで楽しそうに笑いあった。そうして、意気投合したかのように話しはじめたのだ。子供時代にはやっていた遊びやスポーツとか、仕事での失敗談などを。

二人の様子を見ながら、私は胸がチクリとするような痛みと、風が吹き抜けていくような淋しさを感じていた。この島にずっと一人でいて、孤独も爆発するような感情も味わずにいたというのに。

「高階さん、一人で暮らされているんですか？」

「ええ。でも、慣れれば平気。村の人達も、自分たちの伝統工芸を勉強しているらしいと知ったら、好意的に接してくれるようになりました。最初は、うさんくさく思われてたようだけど」

「うん。僕も村の人だったら、いきなり、女性が本土からやってきたら警戒するだろうな」

「それが今では、朝起きたら、家の入り口のところに野菜がおいてあったりするんです。どうぞ、食べてくださいという風に」

「あっ、それはいいな」

聞いているうちに、何だか頭がフラフラした。久しぶりに飲むワインの酔いがまわってきたのかもしれない。

「ごめんなさい。私、少し休むわ。なんだか酔ったみたいなの」

私は立ち上がった。少しふらつく。

「大丈夫ですか？」  
心配そうにこちらを見あげる高階さんに、微笑みかけると、私は二階に上がった。リズは不思議そうに、顔を上げたが、ついてこようとはしなかった。

ベッドに倒れこむと、私はその横の明かりだけつけた。私の周囲だけがほんのりと明るく、部屋の外の部分は溶けたような闇にのまれている。

——なぜ、さっきは不快な気分がこみあげてきたのだろうか？

考えたくないことだけれど、私は嫉妬していたのかもしれない。二人の親密な空気に。彼らが自分よりも若いことに。

闇の中で目をつぶっていると、誰かの手が頬にふれたような気がした。ひんやりしたなめらかな感触の指。ああ、これはシンの手だ。

シンは私の青春で、未来にむかってつき進んでいた日々とわかちがたく結びついていった。

——シン。

心で呼びかけたものの、わかっていた。これは幻影だと。後には薄闇だけがひろがり、冷たい寝台に、私は一人横たわっていた。

「瀬木さん」

遠慮がちな声がかげられ、矢吹君が寢室の入り口に立っていた。

「気分はどうですか？ 少しはよくなりましたか？」

「もう大丈夫よ」

私はベッドの上に取り上がり、彼の方に顔を向ける。

「水でも持ってきましようか？」

「ううん、いいわ」

「そうですねか……実は、夜ボートを運転するのは危険なので、高階さんを泊めてあげることではできませんか？」

「ソファでいいのなら」

私は少し当惑しながら、言った。

「ありがとうございます。彼女も喜ぶと思います」

そう言って、矢吹君は静かに出て行った。彼の気配が消えたのを感じながら、私は眠りにひきこまれていった。

そうして、翌朝、高階さんも島を去っていった。

牧村氏がやってきたのは、4月の第二週の水曜日だった。月の終りに来るといつていたのに、

「もつと、早くお会いしたい」

と、強引にスケジュールを変更してきたのだ。向かいの島の船主の操縦するモーターボートに乗って、棧橋に降りたつた牧村氏は、以前と変わりなくみえた。目鼻立ちのはっきりした浅黒い顔に筋肉質の体。全身から、活力の波動が伝わってくるようだ。

「お久しぶりです。瀬木先生」

「こちらこそ」

島に足を踏み入れた牧村氏は、あたりを見まわした。矢吹君がいなくてよかった、と心底思う。彼はリズに予防注射を受けさせるため、隣りの島の獣医へ行ってくれているはずだった。もちろん、リズを連れて。

「何もない島ですねえ。植物が気味悪いほど茂っているだけで……よく、こんな所に一人でいられるものだ」

「せっかくだけど」

私は言った。

「はやく、私の家に行って話を進めましょう。いつまでも、浜辺に立ちつくしているわけにはいかないわ」

コテージの中に入ると、牧村氏は表情をひきしめた。

「なるほど。はじめで、この島を見た時はこんな亜熱帯の野蛮なところは先生らしくない、と思いましたが、この家は確かに先生の人柄そのままですよ」  
アトリエに通し、今までかきあげた絵を見せると、彼は一枚一枚丁寧に見た。

「色に深みがでましたね。花の幻想性が一段高いグレードに達していますよ」

私は、ほっと一息ついた。彼の人間性はともかく、その鑑賞眼は確かだ。これなら、まずまずというところだろう。ところが、牧村氏はこんなことを言い出したのだ。

「ただ、私としては、先生がここにいることは、そうプラスになることでは

「いと思っけています」

「それは、どういうこと？」

「私は眉をひそめた。」

「先生がこの島から得るものはないだろうという意味です。絵を見たら、わかります」

「さつき、あなたがほめてくれたばかりじゃない」

「ええ、言ったことは本当です。でも、それだけだということでもありません」

「牧村氏はこちらに向き直り、私の目をのぞきこんだ。」

「正直な所、私は失望してゐるんですよ。南のさいはての島に閉じこもられたと聞いた時、私は驚きました。期待していたのも確かです。これで、先生の絵は劇的に変わるだろう、と。まったく新しい絵の対象を見つけるかもしれない、とも思いました。ジョージア・オキーフがニューメキシコの砂漠に同じこもって、キナバル山や雲を描いたようにね」

「私は変わらなかつたというのね」

「はつきりいつて、そうですね。この島にいろいろがいますが、先生自身とは何のかわりもない、ということですよ」

「そんなことないわ」

「私はいつのつた。」

「ここにきて、私は心の平和を得たわ。こんなに満ちたりて、静かな日々は以前には考えられないことよ」

「それにしちやあ」

「牧村氏の口調は、突然少し乱暴になった。」

「あなたの絵のどこにも、この島の空気が感じられませんな。失礼ですが、ここにずっといたって、先生の画家としての成長を助けるとは思いませんね」

「私達はにらみあつたまま、そこに立ちつくしていた。そのまま数分——いや、ほんの一、二分だったのかもしれない——お互いに体を固くして、息をつめていると、それを救うかのように矢吹君の声がとびこんできた。」

「帰りましたよ。リズは診察も受けましたが、どこも悪いところはないうそです」

「そうして足音がアトリエまで進んでくるのが聞こえ、矢吹君があらわれた。驚いた様子だが、彼には東京から客があることをいつていなかったから当然だ。」

「ああ、こちらはSギャラリーの牧村さん。私の作品を扱っていただいているの。牧村さん、こちらは矢吹さんとおっしゃる方で、しばらく前から島に滞在されてゐるんです」

「二人はぎごちなくあいさつした。だが、次の瞬間、牧村氏は言った。」

「君、矢吹君とか言ったが、どこかでお目にかかったことはないかね？」

「そうかもしれませぬ」

「矢吹君は意を決したように言った。」

「僕もギャラリーで働いていましたから」

「何て名前のギャラリー？」

「表参道の『希里夢』です」

「ああ」

「そこで、牧村氏は大きくうなずいた。」

「一年ばかり前、『希里夢』のオーナーと西域の美術品について話をかわした

ことがある。その時、オーナーの傍らにいた青年が君じゃないかね？」  
『希里夢』のオーナーは僕の叔父なんです」

「そうか。それにしても、こんな南海の孤島で顔をあわせるなんて奇遇だね。君はどうして、こんなところにいるんだい？」

人の家に来て「こんなところ」とは失礼ではないだろうか？ 私がムツとするのも気づかない様子で牧村氏は続けた。

「と、いうのもここにいるのが瀬木先生という一筋縄ではいかない女流画家でいらっしやるからね。それとも、なにか君も彼女のファンだというんじゃないだろうか？」

「ふうん、そうか。それで、いつからいるんだい？」

「一か月前からですが」

「えっ？」

そこで、牧村氏はポカンと口を開けた。予想もつかなかった事を聞いたかのように。

「何のために、そんなに長くいるんだ？」

「ここにいるのが楽しいからです」

「そうかい？」

その声音には、それだけじゃないだろうという言外の意味がふくまれている。やや、気まづくなった雰囲気の中、矢吹君は私の方を向いた。

「じゃあ、僕はリズに水をやってきます。獣医の所で長いこと待たされたのに、一滴も水が飲めなかったんだから」

そうして、彼が階段を下りていく足音が消えた時、牧村氏が言った。

「あの青年は何が理由で、この島にいるんだと思います？」

「さあ、わからないわ」

「まさか、あの矢吹という青年と恋愛関係にあるんじゃないでしょうね？」

「違うわ」

私はきっぱり否定した。

「じゃあ、どうしてなんだ？」

彼は、眉をよせ、目をすえて考え込んでいるようだった。まるで、難しい数学のパズルでも解くかのように。

「ああ、そうだ。そうに違いない」

突然、納得したようにうなずくと、牧村氏は目を輝かせて私を見た。

「今思いましたんですが、『希里夢』は西域地方の工芸品や絨毯を扱うギャラリーですね。私はあの地方の伝統工芸はさほど詳しいって訳じゃないんですが、あちらの遊牧民が使う絨毯の紋様が、先生のデザインするのと似通っていたような気がするんですよ」

「矢吹君もそういつてたわ」

「話に聞くとところによると、絨毯の紋様も遊牧民の織り手がすべて自分でデザインする訳じゃないんですね。業者が基本となる大まかなデザインを彼女達に渡して、それをもとにして織り手が自分の想像力を補って一枚の織物ができる。でも、そこに先生の絵を持ってきたらどうなります？」

「えっ？」

私は思わず聞き返した。牧村氏が何をいおうとしているかわからなかったのだ。



「先生の絵に使われている図柄をそのまま使った絨毯ができあがったらか、という意味です。飾りのボーダーが使われていたりして、先生の作品は、ある意味で図案的ですね。キリムは素朴な織物ですが、複雑な美しさとモダンさを狙ったものを作りだすには、先生を利用しない手はないということですよ」

瞬間、血管が逆流するような怒りが湧きあがって来るのを感じた。この男は人が人を利用するとか、使える価値があるかないかの観点で人生を生きてきたのだろうか？ 私は彼を叩きだしてやりたくなくなった。

「あいにくだけど、私の作品にそんな価値はないわ。大体、あなたは何？ 自分が言っていることが私と矢吹君二人への侮辱だということがわかってるの？」

「侮辱してるつもりはありません」

牧村氏は平然としている。

「ただ、あの青年が目的もなくここに居るのがおかしい、とだけ思っているだけです。人間は、意識するにせよ無意識にせよ、何かを意思して動くものです。」

それに、あの男は商人なんです。私がそうであるようにね」

そういうと、もう一度絵を見はじめた。

「この葦と水辺を組み合わせたものもいいですね。四十号——大きさもまずまずです」

「あなたには売りたいくはないわ」

「それでは話が違います。私はあなたの絵を買い取るために、わざわざここまで来たんですよ」

「気が変わったの？」

「やれやれ。気分を害されたという訳ですか。だが、そんな勝手なことを言われても困る」

私は扉をさししめした。

「どうぞ、帰ってちょうだい。今度から、あなたのギャラリで作品を発表することはしないでしょ」

「私を敵にまわさない方がいいですよ」

威嚇のまじった低い声で、彼は言った。

「私は一流の美術商です。その私を怒らせたなら、あなたの今後の仕事にもさしつかえをと思いますよ」

「かまわないわ」

「そうですか」

足音も荒々しく、牧村氏は出て行った。窓辺に立って、下を見下ろすと、彼がコテージを出て浜辺に向かう後ろ姿が見えた。

私は息を大きくつくくと、そのまま床に座り込んだ。絵具の匂いのしみついたなじみの部屋。それが、一転してよそよそしく見えた。私は、今までここで何をしてきたのだろうか？ あの男の言ったことは不快だが、本当だった。私にはその事がわかってる。

牧村氏はもう戻ってはこないだろう——ほっとしたが、これから先やりにくくなるかもしれない。私の築き上げてきた世間的な評価も、あいつが妨害があれば春の淡雪のように消え去ってしまうことだってありうる。そうなら、そうになった時のことだ。私は気を落ちつけて、お茶でも飲もうと、キッチンに降りていった。

だが、キッチンに入った時、思わずたちすくんでしまった。そこには、矢吹君とリズがいたのだ。リズの背中をさすっていた彼は、立ち上がったが、ジーンズの先は裸足で、全体に無防備な感じがした。

「今の人は帰ったんですね」

「ええ」

「ここから、出ていかれるのが見えました、不機嫌そうでした」

「いいのよ。あんな失礼な男、放っておけばいいわ」

「一体、どうしたんですか？」

私は矢吹君の瞳をまっすぐ見た。

「私が島にいるのは無駄だって、あの男はいったの。私の絵にいい影響をおよぼしていないって……」

「そうですか」

驚いたことに、矢吹君はあいづちをうったただけだった。私を慰める言葉など持ち合わせていないというように。

「それに、あなたがこんなに長く島にいるのはおかしい、というの。何か魂胆があるんじゃないかって。たとえば、私の絵のデザインをあなたが商売で使うキリムの絨毯の紋様に盗用しようとしてるんだらう、と」

「牧村さんは、そう言われたんですね」

彼は深いため息をついた。そこには、あきれたり、腹をたてたり様子はなかった。そうして、静かな声でいったのだ。

「確かにおかしい、と思われるも仕方ありません。それに、牧村さんが言ったことは全く的外れという訳でもありません」

「えっ？」

「僕はあなたの絵を見た最初の時から、強く惹きつけられました。アラベスク——植物紋様のことをここでそう呼ばせて頂きますが——の形が、僕が仕事で扱う西域の人々のそれに似ていて、あなたと彼らの見ている世界観・自然観がどこかで重なっていることを思わせたのです。そして、あなたの作品には磨かれた美意識と洗練がある。それを遊牧民の素朴な表現と融合させたら、どんなに意表をつくものがあがるだろう、と思いました」

「……」

「盗用などというつもりはまるでなくて、機会があつたら、デザインを使わせていただけないか頼もうと思っていました。瀬木さん、今まで黙っていてすみません」

矢吹君は許しをこうように頭を下げた。だが、これはさっきの牧村氏に對した時と同じ怒りをよびさましただけだった。

「じゃ、あなたは認めるのね。私を利用しようとしていたと」

「利用なんてしません」

「私はあなたが、この島に滞在するのを喜んでいて、素晴らしい友人だと思っていたわ。でも、あなたの方はそうじゃなかったということよ」

裏切られたような悲しみが私を支配していた。

「そんなことはありません」

「いいえ。あなたが目的を持って私に近づいたのは、今あなたが認めたことじゃないの……早く、この島から出ていって。もう、あなたの顔はみたくないわ」

「瀬木さん、あなたは誤解している。僕がこの島にやってきたのは、絵のデ

ザインがどうこうという以前に、あなたという人間に会いたかったからです。そして、今ではあなたに会えたことを幸せだと思っています」

「もう聞きたくないわ。出て行って」

その時、矢吹君の瞳をかすめたのは、晩秋の光のような淋しげな色だった。

私は彼を深く傷つけてしまったことを悟った。だが、もうおそすぎる。

「わかりました。僕はこの島から、立ち去ります」

そう言うと、背を向けて立ち去った。パタンと玄関の扉がしまると、あたりはひそやかな影にのみこまれてしまったように、シンとして何の物音も残らなかった。

翌朝、リズを連れて浜辺に行くと、棧橋につなげてあったボートは消えていた。輝くような白に赤と青のラインの走った、美しい工芸品のようだった船。それが消えてしまい、青い海が入江いっぱいになっているのを見ると、彼がもういない、ということが実感された。

リズが棧橋を見、それからこちらを見、不思議でたまらないというように首をかしげている。犬にも、ただならぬことが起こったのがわかるのだろうか？

「ねえ、リズ」

私は話しかけた。

「私達、また二人に戻ったのよ。ここには、私達以外だあれもないの」  
それから、また日々が過ぎていった。以前と同じ静かな日々が。いや、違  
う。私の胸には、小さなブラックホールのような空洞があいてしまい、すべ  
ての感情はそこに吸い込まれていくのだった。

喜びもなく、愛もなく世界は存在していた。心の奥底の湖は、凪いでいるように、さざなみ一つ立てなかった。そうした、無感覚な世界の中で、私はいくつかデッサンをし、そのすべてを破り捨てる。

そんなある日のことだった。ポーチのデッキチェアで、私はコーヒーを飲んで  
いた。初夏の日差しは濃く、光が地面にはねかえる。午後の時間をぼんやり過  
ごしていた私は、突然アダンの木の陰から、高階さんの姿が浮かび上  
がったのにびっくりしてしまった。

「瀬木さん、しばらくです」

彼女は、にこやかに笑って、こちらへやってきた。

「連絡もなしに、ごめんなさい。でも、どうしてもお渡ししなければなら  
ないものがあった」

「何を？」

私は彼女を見あげたまま、首をかしげた。

「矢吹さんから、手紙が来たんです。いえ、私にはではなく、『瀬木さんに渡  
してくれ』とメッセージがあって、手紙が同封されていたんです」

そういうと、手にしていたポストンバッグから、一通の封書を取り出した。  
スモーキーブルーの封筒には、その上品な色とは不釣り合いな乱暴な筆跡で  
「瀬木 容子様」と書かれていたが、何かしら素晴らしい重みを感じさせた。  
金言のように大切なことが書かれている、というような。

「あなた、これを届けるためにわざわざ来てくれたの？」  
「ええ。そうですけど、これもさしあげたくて」

彼女がさしだしたのは、蘇芳色の和紙に包まれた包みだった。開けてみると、優しいやわらかい風合いのスカートが入っていた。葡萄色、群青、金雀色の色がモンドリアン調の四角の枠組みの中で彩られている。和の色調と幾何学図形のコントラストがはっとする斬新さだ。

「フクギやマンダリンから取った染料を使ったんです」

「素晴らしいわ。ありがとう」

私は高階さんに微笑みかけた。

それから、封筒を開けた。中には、クリーム色の便せんが入っていて、ぎっしり文字が書きつらねてある。もどかしそうに、音をたてて便せんを開く私を、高階さんがじっと見守っていた。

「突然の手紙、驚かれたことと思います」

手紙はそんな一文で始まっていた。

「僕は、今トルコにきています。あなたの島を出た後、旅を続けるか、仕事に戻るか迷ったのですが、中途半端に事を終えたくないという思いが日本を出る後押しをしました。自分を魅せてやまなかった絨毯の紋様を探る旅を続けてみようという思い。トルコの荒涼とした大地に咲く花のような、絨毯の美を求める旅は、アンカラから長距離バスで3時間ほどの村から始まりました。峨峨たる岩山がそびえたつ地帯に置き去りにされたような場所です。

トルコは御存じのように、帝国として栄えた歴史を持ち、ヨーロッパとアジアの中継地としての華麗な文化を開花させてもきました。けれど、僕の滞在した村は、赤茶けた土と、空の青以外、色らしい色もなく、岩山のふもとの家はわびしい風景の中にたたずんでいました。そうした家々は夜のとぼりが下りると、黄色い灯がともります。それは、石器時代の昔、人々が岩山の洞穴に暮らしていた時にもついていた灯火と変わりないでしょう。

そうした太古の記憶が今も残っているような土地。人々の住む家は、羊や馬が同じ屋根の下の土間で飼われているような、粗末な小屋としか思えないものです。だが、そうした貧しさは、一歩中に入ると、軽く裏切られたような驚きと共に払拭されてしまいます。ほのぐらい家の壁面にかけられているタペストリー。それは、周囲の質素さとは対照的に、鮮やかな色彩と大胆な意匠で空間を照らしているような輝きがあります。

僕は以前、あなたから植物紋様は生命力を讃えるものだと言いました。それは、万国共通のモチーフなのだ。けれど、この土地に来て、僕はそれだけではないのでは、と思ったのです。

今までは、キリムの買い付けに来る場合も、業者を通しての交渉で、遊牧民や土地の人々の生活に介入してゆくような深いかわりはありませんでした。ですが、土地の大家族が住む小屋に滞在させてもらい、生活を共にするうち、さあつと光がさしこむようにその考えがしのびこんできたのです。

緑の少ない痩せた土地に住む人々にとって、タペストリーの色や紋様はオアシスのようなものではないか、と。

キリムは簡素なものですが、そこに描かれたものは、やはり彼らの緑生い茂る庭園であり、楽園なのです。

僕は天山山脈に向けて旅を続けようと思いましたが、この広大なユーラシア大陸を横切るシルクロードをたどる旅。遠い昔の絹を運ぶ旅は、人々の手の

営みを送り届けるものでもありません。ギリシアの壺や壁画に描かれた唐草文様が、どのように変遷してゆくかを知りたくもなつたのです。

最初は、キリムの売買という仕事から始まった興味がずいぶん飛躍したものになってしまいました。この旅は「エキゾチック」の一言で片づけられるような楽なものではないでしょう。このトルコでさえ、クルド族と呼ばれる自主独立を求める少数民族の対政府へのゲリラ活動に巻き込まれる危険が存在します。

以前、東京のギャラリーで天山山脈近くの中国奥地の工芸品だという段通を見たことがあります。どっしりとした重みのある、毛足の短いその絨毯には、円環状の火炎に包まれた龍の紋様がほどこされていました。でも、それだって、アラベスク紋様が変化したものといつていいでしょう。僕に興味があるのは、人が心に抱く世界や宇宙像としての紋様なのです。

中央アジアの、かつての隊商都市としての面影を伝える小さな町——砂漠に忽然とあらわれたナツメヤシや棕櫚の生い茂る町の中心には、こんこんと泉がわく広場があります。泉のそばの葡萄棚の下には、楽器を演奏する老人がいて、彼の足元には目にも鮮やかな茜色の絨毯が広がっている——こうした情景が浮かぶような気がするので。

瀬木さん、僕はこのユーラシアの果てから呼びかけています。いつか、また必ず会いましょう。

矢吹 透 「

私は手紙を読み終え、きちんとたたんだ。矢吹君がトルコへ行ってしまった。それも長い旅になるだろう——後悔とも悲しみともつかないものが、私の喉元までせりあがってきた。この南の果ての島からは、トルコははるかな場所だ。

「矢吹さん、大丈夫でしょうか？」

高階さんがつぶやいた。

「トルコやイランには、観光ルートを外れると危険な地域がありますし」

「あの人はしっかりした人だわ」

私は心を落ち着かせるように確信をこめていった。

「ああ、そうだわ。コーヒー飲む？」

「あっ、いいえ」

彼女は首をふった。

「実いうと、私、郵便屋としてだけ、ここに立ち寄ったんです。夕方までに知人が染色の材料の植物を持ってきてくれることになって。

フクギ並木を伐採したので、その枝や葉を使っていいといつてくれたんです」

「それなら、仕方ないわね」

「伐採したり、採取した原料をすぐ煮出さないといい色がでないことが多いんですよ」

そう言うと、彼女は身をひるがえすと、コテージから立ち去った。まるで、鳥が羽ばたいていってしまうように。

一人取り残された私は、そのままポーチに座っていた。たたまれた矢吹君の手紙を開いて、何度も読み返し、はるかな異国に思いをはせた。灰色がった茶の丘陵が広がる大地とその夜空にのぼった月。影絵のような静かな世界。

丘陵の砂には、風紋と馬の足跡が残っているが、吹き寄せる風がその足跡を消してゆく――。

そこまで思い浮かべた時、予想もしなかった考えが私を襲った。私も西域に旅立ってはどうかろう？ 矢吹君があれだけ熱っぽく語ってくれた民族の世界像としての植物紋様。それを見、異郷の色彩と匂いを感じることは、私に新たな地平を約束してくれるかもしれない。

ポーチから海を見る。風の吹き抜ける浜辺が広がり、その先にあるのはもういような青をたたえた海。太陽の光を反射する波が魚の鱗のように光った。

そうして、島の周囲をうめつくす、むせるような亜熱帯の常緑の植物たち。緑の小さなジャングルに浮かぶ小舟のようなコテージで、私は静かな時を持った。だが、私の島での滞在は終りを告げようとしている。固い卵の殻にひびが走り、中から生まれでてくるものがいるように。

私には、砂漠の道を歩いていく青年の後姿が見えた。その肩に手をかけ、呼びとめたら彼は何と行って振り返るだろうか？

いつのまにか、そばにきて、前足をそろえて座っているリズの少し塩の匂いのする体に顔をよせながら、私はいつまでも海を見ていた。

〈完〉